「昭和7年の雨乞い　富丘地区編」（抜粋）

（略）富丘とは切っても切れないイワケシュ山の雨乞いについて述べる。豊川部落の記録と併せて当時の生活を偲んでいただきたい。

昭和5年は天候にも恵まれ水稲、豆類の大豊作の年であった。ところが次の6年はうってかわり冷害凶作の年であり、水稲は収穫皆無、畑作物も甚大な被害を受けたのである。

7年の前半は蒔き付け以降好天続きで一時は豊作も期待されたが、その後、雨らしい雨は降ることなく、やがて頼みの入梅も空梅雨に終わり、農家一同は等しく天を仰ぎ、干天に慈雨のくることを心から念ずる毎日を迎えるようになった。

農作物は極度の水分不足のため青色を失い、まさに枯死寸前の様相を示すありさまで、やがて誰が言うともなくイワケシュ山へ登って雨乞いをしてはということになった。この声は部落に高まり、各部落の衆議もまとまって上川沿、下川沿、西川沿3部落から幾人かずつ班編成のうえ、毎日交代でイワケシュ山へ登って雨乞いの儀式を行ったのである。

ある日のこと、西川沿部落（注：富丘のこと。大正11年に上川沿から分離・独立）から当番である幾人かの人が山に登った。福山部落に居住する通称佐藤米松神主は、一本歯の下駄で山頂まで登り、人びとを驚かせたものである。いよいよ頂上に達してその日の雨乞いの儀式に入った。

まず下川沿部落の一人である萩野勝太郎は、神主に向かって曰く「どうか雨を降らしてください。お願いします。雨を降らして下さい」、神主曰く「ソチヤ何才ニナルノウ」「32才になります」「雨ゴイニ来ルニ、ミノ笠モ持タズトハ何事ナルゾ」「誠に申し訳ございません。お許しください。お許しください」と、笑うに笑えない2人のやりとりがあったという。

やがて7月1日となり、その日は例年の川沿小学校の運動会も無事盛大に終了した。閉会式のあいさつで清水友市校長は、「運動会も終了しました。願わくばこの後雨がほしいものです」の言葉を最終に添えたのである。このあいさつと願いが天に通じたのかどうか知るよしもないが、7月2日の朝から降り出した雨は、毎日のように止むことを忘れたかのように続いたという。とかく世の中はままならぬというが、その後は雨天と曇天の毎日で、ついには前年に次ぐ凶作の年になったという。

これ以降、例年、どんな干天が続いても部落民の中から雨乞いの話は出なくなったという。（略）

『イワケシュ郷土史』（昭和49年2月発行）掲載